

仁済大学国際交流

医学部医学科 3年 渡邊 航大

○参加の動機

2014年1月、仁済（インジェ）大学から6名の学生が我々の解剖実習への参加のための短期留学で九州大学を訪れていた。そのとき、私の班は彼らの受け入れ担当ではなかったが、私は国際交流に興味があったため、歓迎パーティーに参加しそこで仲良くなり、それから2週間交流を深め良き友人になることができた。九州大学から仁済大学への留学プログラムもあることを知った私は、それからずっと楽しみにしており、今回それが実現し、今度は私が仁済大学へ行くという彼らとの約束を果たすこともできた。

○PBL

今回の短期留学の目的はPBL、Problem Based Learningを学ぶことであった。PBLを、しかも英語で学習するということは、私にとっては非常に難しいことに思えた。まずはPBLがどんなものであるのかを学ぶために、仁済大学を訪問する2ヶ月ほど前に医学部で開講されていた選択科目の臨床推論演習を履修してPBLを日本語で体験し、仁済大学での学習に備えた。準備をしていたことでPBLの全体的な流れについては把握できていたため、今どのプロセスで何について議論しているのかということは理解できたが、詳しい内容まで捉えることは英語では難しかった。仁済大学の学生の英語力の高さに驚いたが、我々日本人学生との一番の違いは医学英語の語彙力にあると感じた。彼らは普段から医学用語を英語で学習しているらしく、PBLの中でも様々な医学用語を迷うことなく英語で発言していた。私はその多くを電子辞書で調べ、辞書を手放すことができなかった。しかし、私が議論についていけないときには班員の仁済大学の学生が丁寧に説明してくれ、発言を促してくれたため、気後れすることなく楽しく参加することができた。仁済大学のPBLでもう1つの驚いたことは、冒頭でSPと呼ばれる模擬患者の方がいらっしゃるのだが、その方々が俳優であったことである。このことや、仁済大学の学生は週に何時間もPBLの講義を受けていることから、仁済大学がPBLを重要視されていることが伺えた。



○交流

東京の順天堂大学からも2名の学生が参加しており、留学中は仁済大学、順天堂大学の学生と交流する時間も大変有意義で貴重であった。班員が授業後に大学の近くにある、メニューの表記がハングルしかなく日本人だけでは行けないようなレストランへ連れていってくれたり、放課後には街へ連れ出してくれたり、また、先生方が歓迎パーティーを催して下さったりもした。中でも広安大橋を望む夜景が印象的であった。海に面した街であったため市場があり、そこで生きた魚を選んでさばいてもらい、近くの公園で広安大橋を眺めながら新鮮なサシミを食べたことは格別の思い出である。帰国前日の夜には多くの学生が集まって最後のパーティーを企画してくれ、本当に楽しかった。今回友人になることができた仁済大学の学生のみなさんはとても親切で、彼らのホスピタリティに感動した。このような経験をすることで、今後何かの機会に海外の方に対応するときには、私もできる限りのことをして日本を好きになってもらえるようにしようと思えた。



○最後に

この留学の機会を与えて下さった九州大学の康先生や仁済大学の石大賢 (Dae-Hyun Seog) 先生、PBL でチューターをして下さった先生方や貴重な病院見学の機会をくださった先生方、様々な準備をして下さった両大学の学生係の方々、そして1週間を共に過ごした仁済大学、順天堂大学、九州大学の学生のみなさんに心から感謝したい。



友人や後輩たちにもこの有意義なプログラムへぜひ参加してほしいと思う。

